



CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動報告	2~6
公開講座紹介	7
インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
 ●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t s & C u l t u r e



副学長
山本 幸司
 Koji Yamamoto

無用者の学芸

英文学者E・M・フォースターの評論に、啓蒙思想家ヴォルテールに関する挿話が紹介されている。1750年、ヴォルテールがドイツの啓蒙専制君主フリードリッヒ大王の宮廷に寄寓を始めた頃の話である。

ヴォルテールはフリードリッヒの宮廷に到着後まもなく、フランスにいる友人に手紙を書いた。いわく「夕食会の食事は美味い。国王は一座の花形だ。しかし。オペラもあれば、コメディもレビューもコンサートもあるし、ぼくの書斎も本もそろっている。しかし、しかしだ。ベルリンはすばらしいし、王女たちは魅力的だし、侍女たちも美人だ。しかし」。やたらに「しかし」という逆接の言葉が出てくる。フォースターはこの「しかし」は、自分が専制君主の手中に捕らえられたと思った自由人の本能的抗議の言葉だと述べる。フォースターによれば、ヴォルテールは欠点だらけであっても自由人だった。他方、フリードリッヒは魅力も知性もあったけれど、専制君主だったのは言うまでもない。そしてこの宮廷でヴォルテールが学んだのは、自由と多様性と寛容と同情を大切に考えている人間には、全体主義国家の空気は吸えないということであった。フリードリッヒの宮廷は表面的には素敵だし、能率も良かったに違いないが、もっとも大事な「人間の精神」が欠けていた。人間精神に対する信頼だけは一生保持し続けたヴォルテールは、フリードリッヒの宮廷で絶えざる違和感を抱きつつ「しかし」「しかし」の言葉を発し続けざるを得なかったのである。

もちろんこうした違和感はあっても、ヴォルテールはフリードリッヒの宮廷に2年半の間、寄宿し続けるのだから、自由人としての原則だけで生きていたわけではない。もともとヴォルテールは、王侯貴族のパトロンがいなければ生きていけない詩人稼業に早々と見切りをつけて転身したり、金銭に対する執着が強く、投機で大儲けしたり、宮廷社会への出入りに努力したりというような、俗臭芬々たる伝記的事実に事欠かない人物である。

実を言えば、私も若い頃、こうしたヴォルテールの現実感覚

に、何となく徹底していないような印象と一種の胡散臭さを感じていた。しかし、今思えば、それは人生の機微、というより人生の厳しさを真に知らない青二才の空想的批判に過ぎなかったのだ。知識人が精神の自由を堅持しながら、多少なりとも王侯貴族に依存しつつ食べていかなければならないという緊張を、どのように生きるか、その難しさに思い至らなかったのである。

学問や思想に限らない、総じて芸術や文学などというものは、多くの人間が、ただ食べるだけでも必死にならなければならない社会にあっては無用の存在であり、学者や芸術家も社会の無用者だった。無用者を養ってくれるのは、社会の余剰物を搾り取っている王侯貴族のパトロンだけである。社会にとって無用者あるいは厄介者であることによって、彼らは自由であったが、いうまでもなくその自由は、一面において飢えることの自由、つまり世に容れられずに朽ち果てる運命を含むものであった。飢えることの自由と引き替えでのみ、自由奔放な生き方と自由奔放な創造活動を展開することができたのが、おおむね近代以前の芸術家という存在だったのだ。

こうした存在を、例えば折口信夫は「無頼の徒」と表現した。彼は江戸の文学は歌舞伎者の文学、つまり無頼の徒の文学である。無頼の徒の情熱ですべてを突破して出たものが江戸の文学だ。近松・芭蕉・西鶴にも、この無頼の徒の味があるという。江戸の文学者は隠者の立場で、無頼の味をもって世間を見、言いたいことを言い、書きたいことを書いているとも、折口は言う。その一方で、折口は彼ら隠者たちがしたたかに世を渡っている側面を忘れない。隠者は貴族や勢力家のために歌を作り、文を作り、子弟を教育するといった、幫間のような存在であり、それ故にこそ階級に縛られることなく、大抵の階級に自由に入り方ができたというのである。

唐木順三も似たようなことを言っていた。芭蕉の生きた江戸初期は、長く続いた戦国乱世がようやく治まり、生活も身分も固定化し、太平の基礎ができて来た時代だったが、西行以来、詩の精神の本流として続いてきた超俗・叛俗・漂泊の精神を、固定させたり凝着させたりはできない。宗因や芭蕉が主家を離れ、また脱落して流離の身にならざるを得なかった理由もそこにある。芭蕉は固定化してゆく社会、人間を眼前に見ればこそ、いっそう激しく風狂、不住の旅を思わざるを得なかった。世俗におもねり、立身出世を図る連中を見ればこそ、無能無才、夏炉冬扇の無用者の世界を一筋に頼む他なかった。唐木が目撃した近世以前の超俗・叛俗・漂泊の世界は、歴史家網野善彦が描き出した『無縁・公界・楽』の世界とも一脈相通じるものがある。

これらの話が語っているのは、学問・芸術の世界で生きていく上で、まず必要なのは、何があっても奔放不羈に己の途を追求しようという気概・覚悟だということである。

レオナルド・ダ・ヴィンチ複製素描画展

土肥秀行(文化政策学部国際文化学科)

静岡文化芸術大学創立10周年を記念し、2010年10月14日から27日まで本学ギャラリーに於いて表題にある展覧会、そして10月15日には176大講義室でシンポジウム「乱反射するレオナルド・ダ・ヴィンチ」が開催された。

平成22年度の学長特別研究費と浜松信用金庫の助成を受けた本プロジェクトには、代表として高田和文(芸術文化学科)、共同研究者として土肥秀行(国際文化学科)、立入正之(芸術文化学科)、的場ひろし(メディア造形学科)関わった。

今回の展覧会は、東京大学駒場博物館所蔵のレオナルドの複製画コレクションの全体像を紹介するものである。86枚のパネルに収められた合計93点のレオナルドによる素描の複製画は、ユネスコのパリ本部において制作されており、レオナルド生誕500年(1952年)を記念した巡回展覧会のために日本に届けられ、駒場の地に留まることになった。

複製は実寸であり、展覧会はレオナルドの残した画の「本当の」大きさを体感する機会となった。第二次世界大戦後に本格化したレオナルドの素描研究の最初の成果が反映されており、複製に「美術品」としての価値はないものの、「歴史的」価値を認めることができる。

展覧会を通してわれわれが伝えようとしたメッセージは以下の通りであろう。まずは少なくともイタリアでは伝統的に素描画は、「完成作」の副次品ではなく、独立した芸術作品であるとみなされていること、素描画というジャンルが存在すること、である。それは今から一世紀前に美術史家ロベルト・ロンギが「みごとな素描作品には、素描を侵害する色彩を望む必要はない。完璧な芸術作品が備えている特質については、素描以外の場合もすべて同様である」といみじくも述べているとおりである(『イタリア絵画史』)。ただ逆説的ではあるが、当展覧会は、監修者であるイギリスの美術史家アーサー・E・ポハムのアングロサクソンの素描画のコンセプトに基づいており、ゆえに有名な「完成作」の習作とみなしうるものが多く並んでしまっている。こうしたわれわれの意図との齟齬については、解説板や2度のギャラリートーク、シンポジウムの際に説明した。

またヨーロッパにおいては、ダ・ヴィンチではなく「レオナルド」、モナリザではなく「ジョコンダ」と呼ばれるのが常であること、いささか表層的ではあるが、そのような日本のわれわれにとっての「新しさ」も来館者にうったえたかったことのひとつである。

というのも「天才」の異名であるレオナルドのはたしてどこ

が「すごい」のか、あえて考えてみる機会がないためである。それゆえに来館者の意識の変革を企図しないわけにはいかないと考えた。14日間の会期中に展覧会を訪れたのべ1732名の方々のアンケートを読んでいると、企画側の意図をこえたところを鋭く見据えている感想が少なくないことに気付く。特に「未完成の完成」については、研究者のあいだでも今後議論されていくであろう。

最後に付け加えるが、新聞・テレビなどマスコミの反響が大きく、多くの学外の方々にお越しいただき、大学による「地域貢献」のよき例となったことは歓迎すべきであるが、一方で内部の学生が、より積極的に運営に関わる、また単に鑑賞のためにギャラリーに寄る、ということがあってほしかった。学内広報を十分以上に行っているにもかかわらず学生の反応が鈍いのは残念である。もちろんどんな場合でも、「おもしろいこと」を敏感に察知し、主体的に関わろうとする学生はいるのだが。

シンポジウムについては、ロベルト・テッロースイ(東北大学)、高田和文、マルコ・マツィ(ビデオアーティスト)の3氏の発表原稿が2011年3月発行の「静岡文化芸術大学研究紀要」第11号に掲載されており、ウェブ上でも参照可能である。

また2011年3月22日から6月24日まで、東京大学駒場博物館に「収藏品展」として巡回する。いうなれば、たとえ「モノ」が中央のものであっても、パッケージングが地方で行われてリニューアルする、そういったかたちの地方からの情報・企画発信を試みる機会となった。



活動報告

創立10周年記念事業（特別公開講座） 新作ミュージカル公演

ミュージカル・ドラマ

「いとしのクレメンタイン」〈初演〉という授業

永井聡子(文化政策学部芸術文化学科)

3年の準備期間に53名の学生の参加とプロのスタッフ、観客総勢約630名が見守る中、2010年12月17日・18日の2日間にわたる公演は幕を閉じた。本学創立10周年を記念して企画制作したミュージカル・ドラマ「いとしのクレメンタイン」(初演)は、学生への教育現場として舞台制作過程そのものを材料とする授業であった。

同じアマチュアなら、地域の劇場で舞台制作に市民が参加するというこの意味は、個人の楽しみのみならず文化振興につながる仕組みが日常生活を主としながらも地域と密着した形で存在することである。一方、今回の企画の目的は、大学4年間という期限付きの学びの中で、学生を劇場文化や舞台芸術の仕組みを習得させることだけではなく、公立文化施設の課題でもある地域に根差した創造的な劇場運営の柱ともなるこれからの担い手として、また地域そのものの文化力向上を担える人材を育てるところにあった。そして一般公開することで、地域における文化環境創造へのトライアルを目指した。

舞台作品には、この企画に賛同した演出家 伊豫田静弘氏をはじめ、田中利花氏、戸井勝海氏の実力派のミュージカル俳優、ピアノの島津秀雄氏ほか4名の生バンド、舞台美術家 朝倉撰氏、舞台照明家 服部基(企画実施中に紫綬褒章顕彰)などのプロが結集し、そのアシスタントとして学生が参加した。興業ではなく、あくまでも教育の一環であった。2回公演のための準備過程にはどれほどの精神力が必要であるか、一瞬の本番のためにどれほど連携が必要か、集中力、決断力が必要か、それを考える時間と空間を大学の中に用意した。その空間に身を置きながら学ぶところに舞台芸術と教育との融合を考える大事な要素がある。従って、この公演は次のステップへ展開されることに意味がある。気をつけておきたいのは「授業外のイベント＝お祭り」とひとくくりにされることで、企画への取り組み内容に対する誤解があることである。作品以外にどこまでが制作内容なのかというところは外からはほとんどわからない。舞台作品の照明なども、ウエディングの照明と同じ次元で興味をもつ学生も少なくない。事実、そうした興味で本学を受験しようとする高校生もいる。それを一括して切り捨てるのではなく、そこから舞台芸術と教育の現場との融合へと昇華させる環境を創造することに努めていきたい。

学生に劇場や舞台芸術という分野をどう伝え、文化を支える人材として送り出すのか、これは大学全体の支えが必要である。今回の試みについては、中日新聞、静岡新聞に「大学発信の舞台でプロから指南され学生が奮闘」という記事が掲載された。今後、本学を卒業した学生が専門領域で活躍すること、少なくとも舞台芸術に対する理解を持ち、社会人の基礎力も備えて、また地域の文化力を支える市民ともなって示すことができるよう望みをつなぎたい。

授業－稽古から本番までの全公開

学生は1年～2年間で、「演劇文化論」「演劇史」「舞台芸術論」「芸術文化基礎演習」等の授業を通して歴史や理論を学ぶとともに、公演制作の実践を通してプロがドラマを舞台化することとは何かを追求する姿勢や「鑑賞者」を意識しながらも、制作スタッフの任務を理解することを学習した。特に今回の舞台公演では、プロフェッショナルとは何かを学んだようで、次の機会があれば参加を望む声がほとんどであった。

※大学教員Staff：監修 平野昭教授

企画・制作プロデューサー	永井聡子講師
舞台芸術研究アドバイザー	梅若猶彦教授
広報アドバイザー	片山泰輔准教授
声の出演協力	立入正之准教授

事前公演講座「舞台美術家という仕事」

対談 朝倉 撰×扇田昭彦(演劇評論家)(11月25日)



「いとしのクレメンタイン」稽古見学



「いとしのクレメンタイン」本番

「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2010」を終えて

林 左和子 (文化政策学部文化政策学科)

本コンクールの第一の目的は、「ユニバーサルデザイン絵本」の存在を広く知ってもらうことにあった。触る絵本や布の絵本を製作し提供している団体は日本各地に存在し、郵送で全国に貸し出しているところもある。しかしその活動はまだ十分に知られていないと言いがたい。また、活動団体の交流の機会が限られており、技術や知識の交換や継承が難しいという問題もある。本コンクールの開催と応募作品の展示を通して、多くの人にその存在を知ってもらうことが、利用や製作につながっていくことを期待した。2010年には、国際ユニバーサルデザイン会議が浜松で開かれた。時期を同じくして応募作品の展示会を開催することで、世界各国から訪れた人に、本コンクールの作品を見ていただくことができると考えた。さらに「国民読書年」でもあり、すべての子ども(人)が親しむことのできる絵本の工夫と、親しんでもらう環境を考えていくきっかけとなってもらえれば、という思いがあった。第二の目的は、ユニバーサルデザインの工夫によって、これまでにないアイデアの絵本が生みだされること、「絵本」の可能性を広げることのきっかけとなるのではないかと考えた。

このため、応募規定の作成で、悩むことになった。「ユニバーサルデザイン絵本」とは何か具体的に示されていないと応募しにくい。しかし細かく定義してしまうと、可能性を排除してしまうことにつながりかねない。いろいろな人の意見をうかがい、結果として「いろいろな立場の人が共に楽しめるよう工夫されている絵本」、「画材・技法・大きさ・判型は自由」とかなりおおまかな規定に落ち着いた。

審査員は、様々な立場の方をお願いした。審査委員長の椋上久子氏はJBBYバリアフリー絵本実行委員長として、日本を始め世界のバリアフリー絵本に詳しい方である。辰巳なお子氏(浜松市子ども家庭部長、元浜松市立中央図書館長)と鈴木由美氏(県立中央図書館子ども室担当)は、いずれも公共図書館児童サービスの担当者としての経験をお持ちの方である。障害のある方の立場から審査していただける方として、ス波千秋氏(NPO法人六星ウィズ代表)と須山正子氏(静岡県静岡北特別支援学校教諭)に、さらに絵本作家の方にも加わっていただきたいと考え、武田美穂先生に特別審査員をお願いした。その他に本学教員が2名加わった。

広報活動では、マスコミへの情報提供に加え、美術・デザイン関連の大学、専門学校への呼びかけ、県内をはじめ本学に関心を持ってきている高校、浜松市内やその他の小学校にポスターとチラシを送った。さらに、絵本学会会員や布の絵本などを製作している団体へも応募をお願いした。

8月末から作品が届き始め、最終的に大人部門135点、高校生部門14点、子ども部門30点の応募があった。10月21日に開かれた審査委員会では、多数の作品を前に、6時間わたる議論が行われた。絵本としてのおもしろさ、場面展開の工夫と、ユニバーサルデザインの工夫が十分であるかが、審査基準の中心であった。審査委員会での白熱した議論については書ききれないが、大賞に選ばれた作品を中心に簡単に紹介していく。

子ども部門の大賞となった4作品は、いずれも熊本県宇城市市立中央図書館で開催された講座で製作された布の絵本である。子どもたちの感性を生かし、短い中でストーリーに起承転結がある点が高く評価された。4作品の中の1つを選ぶのが難しかったこと、指導された方も評価したいという意見が強かったことから、まとめてグループ特別賞となった。

高校生部門は、大賞は選出できなかったものの、工夫をこらした作品が多く、優秀賞として2点、さらに特別審査員賞1点を選んだ。

一般部門は一番応募数が多く力作ぞろいであったため、議論も長く続いた。『着物シアター「かぐや姫」』は、実演してもらって楽しむものである。「一般の絵本コンクールではおそらく「絵本ではない」と片付けられてしまうでしょうね。でもそれを残すところにこのコンクールの特徴がある」といった意見や「絵本は、読んでもらうのが基本だから演じてもらうのもありではないか」といった意見から、「年代を超えて楽しむことができる作品」として大賞に選ばれた。奨励賞『クッキーをつくろう』は本物の小麦粉や砂糖が添えてあり、「味わう」というこれまでにない視点が評価された。

展示会は、10月30日～11月3日に、静岡文化芸術大学自由創造工房で開催された。最終日には表彰式に続き、『着物シアター「かぐや姫」』と紙芝居『沼のぼあさん』の実演を行っていただいた。あいにく初日に暴風警報が発令されたものの、5日間で381名の方が来場され、受賞者の方も多く来てくださった。

なお受賞作品の一部は、その後、静岡県立中央図書館で展示し、11月25日のNHK静岡放送局「たっぴり静岡」で紹介されている。

今回のコンクールは、多くの方のご協力があったが無事に終わることができました。ご支援、ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

審査結果一覧(大賞、優秀賞、奨励賞の作品名のみ)

	一般部門	高校生部門	子ども部門
大賞	着物シアター「かぐや姫」	該当なし	おなががすいたよ クマのさんぽ ひまわりのたね きれいなにじ
優秀賞	どうぶつさんだーれ モグモグ ぱっくん 沼のぼあさん りんごの木 さんかくのえほん てんでんむすび	めくりやすい絵本 エハコ	ピタUFO このかげ なあーに きょうりゅうのたまご
特別賞	たのしいどうぶつえん (審査委員長特別賞)	ひろがるおもいで (特別審査員賞)	該当なし
奨励賞	クッキーをつくろう ひだまり時間	該当なし	該当なし



一般部門・大賞
『着物シアター「かぐや姫」』の上演



活動報告

JDP（自助具デザインプロジェクト）の活動

坂本鐵司（デザイン学部生産造形学科）

1. 「自助具」とは何か

自助具についての厳密な定義は存在しない。私達は概ね「身体の不自由な人が日常生活を過しやすく、自分でできるように工夫した道具」としている。一人ひとりの手や腕、足などの動きや障害の程度・生活状況に合わせて機能・寸法・形状等を工夫し一品ずつ制作されるところが市販の福祉用具とは異なる。自助具制作のボランティアグループは全国各地に存在し、様々な技術者やリハビリテーション作業療法士・看護師など専門家の参加や支援の下に活動が展開され、良いアイデアのもの、機能的に優れたものなどが既に多数制作されている。

そのような中、デザインを学ぶ者として「より美しくデザインされた自助具を作り地域の方々に提供しよう」という意識から、平成18年4月、静岡文化芸術大学デザイン学部内にボランティア組織、自助具デザインプロジェクト（以下JDP）を発足させた。現在デザイン学部生（2～4年生）、大学院生、研究生、および指導教員1名を含め計27名のメンバーで活動している。図1、図2はJDPが制作した自助具の例である。



図1. 長柄櫛
腕を上げることの出来ない人が使用する。櫛の柄はフレキシブルで長い。



図2. 錠剤薬オープナー
片手で錠剤薬を開け、粉薬袋をハサミで切る際に使用する。

2. 活動の目的

JDPでは活動に当たり下記3つの目的を定めている。

- 1) 自助具制作・提供活動を通じて地域に居住する身体の不自由な方々の生活自立を支援する。
- 2) 自助具のデザイン向上。
- 3) JDP活動のPRと普及。

3. 活動内容

1) 自助具制作と提供

自助具を制作し提供する対象者は浜松市の中心部に居住し、身体に何らかの不自由を抱えている方々である。活動開始から本年2月までの間でリウマチ、脳血管障害による片麻痺の方など約50名の方々に100点を越す自助具を提供してきた。一つの自助具使用がきっかけとなり次々と新しい自助具を依頼される方も多い。また、リハビリ病院、福祉施設からの紹介で制作依頼をする方も次第に増加し、自助具制作件数は急激に増えてきている。但し、JDPの目的は「利用者の生活自立支援」にあるため自助具制作と言ってもその全てを自作することにはこだわらない。既製品を購入し、部品として利用の方が安い、早い、使いやすいのであれば迷いなくその道を選ぶ。

いずれにせよ、生活の中で欠かすことの出来ない道具としてJDPが制作した自助具を活用している方が増えてきている。

2) 活動のフロー

図3は自助具制作のフローを示したものである。

JDPでは毎月2回ミーティングを行い自助具に関する学習や情報をさぐる。そして7月下旬～8月上旬にかけてメンバー各自

が模索・考案した作品の展示会を開催する。これは単なる展示会ではなく、自助具制作依頼を受けるための見本品展示の場である。来場した方々に見本を見る・触るなど試して頂く、その上で制作の依頼を受ける。どのような自助具を利用するのか？それを選び、決めるのはあくまでも利用者本人である。JDPは提案、情報提供を行うのみであり自分達が制作し展示する見本品に自信があったとしても、決してそれを押し付けるようなことはしない。しかし、依頼者の要望は必ずしも本当に自立に必要な機能・デザインを捉えているとはいえない場合がある。このような場合、依頼者が正しい選択をするように導くことが必要な場合もある。このあたりが単に造形的なデザイン作業にとどまらない、幅広い知識と判断力、総合的デザイン力が求められるところでJDP活動の奥の深さとなっている。制作依頼を受けた後、制作担当者を決定、改めて依頼者宅を訪問、展示した見本品を基に身体状況、生活状況などを確認しながら打ち合わせを繰り返し提供する自助具の仕様・デザインを決めてゆく。

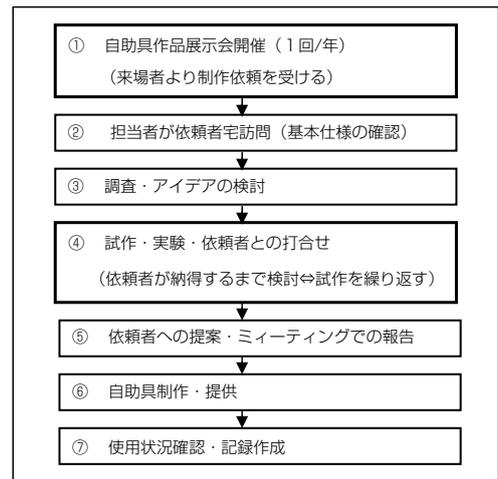


図3. 自助具制作のフロー（特に①と④が活動のポイントとなる）

4. 学生はデザインを実践して学ぶ

自助具制作は身体が不自由な方（ユーザー）から直接の依頼を受け、そのニーズに応じて制作される。依頼者から納得する評価が出されるまで繰り返し試作や打ち合わせが行われる。これがもし一般的な大学の授業であればユーザーは仮想となり、作品は模型、評価するのは教員と自己評価に止まってしまうであろう。JDPは切実な要望を持ったユーザーと直面し、ニーズを探り、考え、制作・デザインし、実際の生活の中で使用してもらい評価を受けることになる。即ち“デザインを実践して学ぶ場”となっている。

5. 課題

展示会では遠方（静岡県外）から来場し自助具制作を依頼される方も多くなっている。自助具制作・提供に至るフローより遠方の方への対応は現在のところ難しい。JDPのように、ある一定の地域をカバーする活動が各地に生まれ、活動拠点が点から線へ、そして面へと繋がってゆくことが望まれる。そのためにもJDP活動のPRにより自助具に関心を持つ人々が増えることを期待している。

ヨーロッパにおけるバンジョー： フレンチ・マンドリン・バンジョー展に寄せて

谷川真美（文化政策学部芸術文化学科）

本学ギャラリーで開催された「フレンチ・マンドリン・バンジョー：見てみてわたしの背中」展の展示作品は、フレンチ・マンドリン・バンジョーという楽器である。その名前のとおり、この楽器は「フランスで作られた」「マンドリンのような」バンジョーなのだが、実はバンジョーとは謎多き楽器である、といったら驚かれるだろうか。一般的によく知られているのは、バンジョーがおもにブルーグラスやカントリーといった音楽ジャンルで用いられ、おもに黒人に演奏され、黒人音楽とともに世界に広まったというイメージだろうか。

浜松市楽器博物館が所蔵する数多くのコレクションの中でも、バンジョーという楽器は異彩を放っているといえるかもしれない。貴族的な雰囲気を持つヨーロッパの楽器とも、それぞれの土地に根差した強烈な民族性を放つアジアの楽器とも異なり、バンジョーはアメリカで生まれた「発明」品である。楽器は人間が創り出したものなので、ある意味どの楽器も発明品といえるが、発明品であるにもかかわらず、バンジョーの「出生」について明らかでないことは多い。バンジョーができたのは19世紀半ばのアメリカである。黒人たちが生まれ育った西アフリカの民族楽器がそのルーツだと考えられてはいるものの、アメリカでの発祥、展開の過程も完全に解明されているわけではない。

19世紀末、この楽器はミンストレル・ショーの流行によってヨーロッパにもたらされる。本学で展示されたバンジョーは、ヨーロッパでこの楽器が定着していく中、フランスで生まれたものである。胴部背面に施された装飾には、それまでのバンジョーが持つ「黒人の楽器」のイメージと異なる優美さ、軽やかさがあり、それらが制作されたと考えられる1920年代の流行や夢を映すモチーフが採用されている。当時の最新流行の女性像、花や楽器を組み合わせた優雅な模様、あるいは幾何学的なデザイン、飛行機やエッフェル塔などのモダン・エイジを象徴する事物など、それらのモチーフの持つ指向は、ミンストレル・ショーの延長線上にあると考えられるショービジネスの華やかさも異なっている。

このフレンチ・マンドリン・バンジョーの謎は、まず、楽器が存在した環境に関するもの、つまり「フランス」に関するものである。これらのバンジョーは、現在残っている数から考えると当時かなりたくさん製作され、普及していたと考えられる。一般的に、ヨーロッパの楽器産業は19世紀末ごろから急激に発展し、20世紀初頭のフランスでは、パリに多数の大きな楽器工房、あるいは楽器工場があるだけでなく、その支所はフランスの各地方都市、ベルギーのブリュッセル、アントワープなどにもあった。つまり、その背景として楽器を演奏することが一般化していく傾向をみることができる。

しかし「バンジョー」というアメリカの（当時）新しい楽器がそのように多く受容されたとしたら、それはどのような状況下であったのだろうか。そこには、さらにいくつかの疑問が生じる。バンジョーという楽器が、限られた音楽家が演奏するのではなく、ヨーロッパの、なおかつ、楽器に施されたような

フェミニンな絵柄を好む種類の人々に受容されるようになる経緯とはどのようなものか。そのような装飾を好んだ人々とはどのような社会階層の人々なのか。その楽器の普及をじっさいに担った楽器工房はどこにいくつぐらいあり、どのように販売を行ったのか。また、そのような楽器としてバンジョーを採用したのはどのような理由によるのだろうか。

さきに記した様々な疑問はいずれもこれまでまったく明らかにされていない。この展覧会開催に際して様々な資料を調査した結果、その特有の出自からか、バンジョーという楽器はヨーロッパにわたって以降、楽器自体としての展開についても、楽器受容の展開についても研究がないことが明らかになった。おそらくヨーロッパの研究者にとって、この異国産の楽器のヨーロッパでの展開はあまり興味をひくものではないのだろう。しかし、近年注目される異文化受容の歴史という視点でこの楽器の変遷を考えると、きわめて興味深いものがある。

フレンチ・マンドリン・バンジョーについての疑問のもう一つは「マンドリン」に関するものである。一般にマンドリン・バンジョーはマンドリンとバンジョーの両方の特性を持った楽器と考えられるが、それはこの楽器が折衷的なもの、過渡的なものである可能性を示している。このバンジョーが現れた年代を考えると、楽器が使用される場所がこじんまりした空間からより大きな空間へと変化し、それに伴って、より多数の聴取者に届く音量と、より多様な表現ができる音色を持つ楽器が必要とされる時代へと変化する、まさにその時期にあたる。この楽器が当時使用されていたバル・ミュゼット（ダンス・ホールのような場所）での演奏に関する文献によれば、1930年代ごろになるとバンジョーの演奏者はその楽器を徐々にギターに持ち替え、バンジョーという楽器がいわゆるバンド編成の中から次第に消失していったことがうかがえる。

このような背景で、むしろマンドリン・バンジョーという楽器が採用される理由は何か。展示された作品の中には、楽器を製造した会社やブランド名が判明し、商品カタログがあるものも存在する。そのカタログをみると、おそらくはセミ・オーダーで、顧客の好みで装飾を注文できるようになっていた一連のバンジョーの中には、マンドリン・バンジョーではなく、いわゆる通常のバンジョーも見受けられる。しかし同時代の類似の装飾を持つ楽器の多くは、通常のバンジョーよりやや小ぶりなマンドリンの音色を持つ（といわれる）マンドリン・バンジョーという楽器のほうである。

このような数々の疑問から導き出されるフレンチ・マンドリン・バンジョーの正体とはどのようなものだろうか。それは、19世紀末から20世紀はじめという時期に、はじめて歴史の表舞台に登場する「女性（たち）」の存在、「大衆」の存在と深くかかわっている。

バンジョーをめぐる謎は、展覧会が終わってもまだまだ続く。

※「フレンチ・マンドリン・バンジョー展」2010年12月3日～18日

公開講座紹介

中国の対外経済交流と日中経済関係の緊密化

馬 成三 (文化政策学部国際文化学科)

2010年度の本学公開講座は前期(「文化とデザインの時代Ⅱ」9/4~10/16) 5講座、後期(「中国の今を知る-社会・経済・民族-」11/27~1/22) 4講座が開催され、多くの受講者が参集した。本稿では後期公開講座の中から、馬成三教授の講義内容(12/4)を紹介する。

対外経済交流の活発化

対外開放政策の実行(1970年代末)、特にWTO(世界貿易機関)加盟(2001年)を背景に、中国の対外経済交流は急拡大している。1980年に381億ドルだった貿易総額(輸出入合計)は2009年には2兆2000億ドルへと58倍に拡大し、米国に次ぐ世界2位にランクされている。

なかでも中国市場の魅力増大を反映するものとして、中国輸入の急拡大が特に注目される。1980年に中国の輸入規模は日本の7分の1しかなかったが、2009年には日本の約2倍に相当する存在となった。世界輸入に占める中国の地位も急上昇し、2009年にはドイツを抜き、米国に次ぐ第2位に躍り上がった。

長い間、アジア諸国・地域にとって、米国は最大の輸出市場、日本はその次であったが、いまは多くの国・地域にとって、中国が最大または米国に次ぐ輸出市場となった。米ビーターソン国際経済研究所所長のフレッド・バーグステン氏(前財務次官補)によると、「中国は極めて開放的な市場」、「中国市場の開放度はGDP比でみると、米国の2倍、日本の3倍」にもなる。

日本の最大の貿易パートナーと重要な投資先

1980年に日本貿易の3.5%だった対中貿易の割合は、2009年には2割を超えている。2004年より対香港貿易を含む日中貿易総額は日米貿易を抜き、中国は米国に取って代わって、日本の最大の貿易パートナーに浮上した。

日本の輸出市場として、1990年に米国の15分の1だった中国の割合は、2009年には米国の約1.2倍に拡大、香港向けを含む対中輸出が日本輸出の4分の1を占めている。2010年には日本の対中輸出は対米輸出より6割も多く、日本輸出の対中依存がより鮮明になった。

他方、中国貿易に占める対日貿易の地位低下が目立つ。長い間、中国にとって最大の貿易パートナーだった日本は、2004年よりEUと米国に抜かれて第3位に転落し、なかでも中国輸出の対日依存度は1980年の21%から2009年の8%へと、日本輸出の対中依存度の約3分の1に低下した。

中国が改革開放政策を実行してから、中でも1990年代以降、日本企業の対中直接投資は着実に増加し、2009年末現在累計で695億ドル(実行ベース)に達している。中国のWTO加盟を受けて、特にリーマンショック以降、日本企業の対中投資に

はいくつかの変化も生じている。

①投資目的の面では、安価な労働力や優遇措置追求型の投資から、中国国内市場をターゲットにする投資への転換、②投資分野の面では、金融・保険・小売などサービス業への拡大、③投資対象地域として、沿海部から内陸部への拡大、④生産と販売の拠点にとどまらず、中国を技術開発と人材供給の拠点として活用する動きの活発化などがそれぞれである。

中国の成長方式転換と日本の「チャンス」

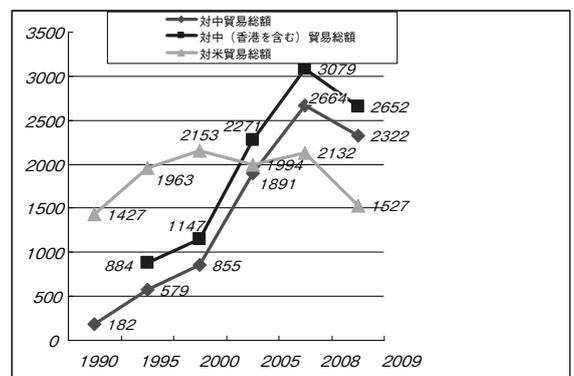
中国経済は高成長を達成した一方、成長方式には深刻な欠陥も露呈されている。個人消費より固定資産投資と輸出への過度依存、技術進歩より資源の大量投入への依存などがそれぞれである。このような成長方式は、低効率、資源浪費、環境破壊、対外経済摩擦の増加をもたらすだけでなく、持続不可能という難点も抱えている。

中国政府は成長方式転換の具体策として、個人消費の拡大、省エネ化を含む産業構造の高度化、地域間の協調発展の促進などを強調しているが、なかでも内陸部のインフラ整備、環境改善や省エネを図るには日本の協力が必要で、日本にとっても大きなビジネスチャンスになると期待される。実際、日本政府は「アジア戦略」などを内容とする「新成長戦略」を掲げているが、その多くは中国との連携の強化が不可欠とされている。

経済の高成長や所得水準の向上を背景に、現在、中国の中間層や富裕層を中心に海外観光が一大ブームとなっている。世界観光機関の予測によると、2020年までに中国人の海外渡航者数は延べ1億人になる見込みである。

日本政府は「観光立国戦略」を打ち出し、自国の観光資源を活用し、2009年に679万人だった訪日外国人を2020年までに2500万人、将来的には3000万人とする目標を掲げているが、最大のターゲットは中国人観光客とされている。

日本の対中貿易と対米貿易の比較(単位:輸出入合計、億ドル)



資料:財務省貿易統計(ジェトロが米ドルに換算)。

○静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2011

○上尾直毅のクラヴィコード演奏会

4月16日(土) 浜松市博物館展示ホール(浜松市中区舘塚)
 開場:13:30 開演:14:00
 演奏・解説:上尾直毅
 全席自由 一般:1000円 学生:800円 中学生以下無料(要整理券)

○サム・ヘイウッド ピアノ・リサイタル

5月14日(土) 静岡文化芸術大学講堂
 (前日5月13日には同じく講堂で、ピアノの公開レッスンを行います。)
 開場:14:30 開演:15:00
 演奏:サム・ヘイウッド
 全席自由 一般:2000円 学生:1000円 中学生以下無料

○スピカ・クアルテット演奏会(弦楽四重奏)

7月3日(日) 水窪カモシカと森の体験館(浜松市天竜区水窪)
 開場:13:30 開演:14:00
 演奏:スピカ・クアルテット(東京藝術大学現役学生の弦楽四重奏団)
 全席自由 一般:1000円 学生:800円 中学生以下無料(要整理券)
 (浜松市内からの送迎バスを用意致します。)

前期公開講座

平成23年度前期公開講座

「フランス——豊饒なる六角形」 全講座 13:30~15:30

均整の取れた六角形(ヘキサゴン)の形をした国フランスは、ヨーロッパの十字路に位置し、多様性に富んだ豊かな歴史や文化を培ってきました。今回の講座では6人の話者が、美術や歴史、食文化や観光など、伝統に裏づけられた誰もが知るフランスの魅力の諸相をさらに深く追求する一方、植民地支配によって外部の地に根付いたフランス文化の意外な側面、異種の要素をとりこんで新たに変貌する今日のフランスの姿にも迫ります。

第1回:6/18(土) 文化政策学部 芸術文化学科 立入正之 准教授
 「セーヌとパリを描いた画家たち」

第2回:6/25(土) 外部講師 Héberlé Bernard(エベルレ・ベルナル)氏
 「日本とフランスにおけるパティスリー、その伝統と進化」(フランス語:通訳付き)

第3回:7/2(土) 文化政策学部 国際文化学科 永井敦子 准教授
 「近世の宮廷文化」

第4回:7/9(土) 文化政策学部 国際文化学科 岡田建志 准教授
 「ベトナムにおけるフランス文化の影響」

第5回:7/16(土) 文化政策学部 国際文化学科 溝口紀子 准教授
 「スポーツから読み解くフランス社会」

第6回:7/23(土) 文化政策学部 国際文化学科 石川清子 教授
 「南仏という神話」

第6回静岡国際オペラコンクール

開催期間/2011年11月12日(土)~11月24日(木)

会場/アクトシティ浜松 大ホール

予選:第1次予選 11月12日(土)~14日(月) 第2次予選 11月16日(水)・17日(木)

本選・表彰式:11月20日(日)

入賞者記念コンサート 11月22日(火) 静岡音楽館AOI(静岡市)

11月24日(木) 紀尾井ホール(東京都千代田区)

編集後記

創立10周年の記念事業もそれぞれ成功裏に終了し、本学は新たなDecade(10年)を歩み始めました。今号の中で幾つかの記念事業についての報告がされていますが、いうまでもなく、大学において催される「記念事業」は単なるイベントやフェスティバルではありません。どのような内容であれ、それは日頃の教育・研究と密接不可分の関係にあるもので、事業終了後も変わることなく地道な活動は刻々と積み上げられていきます。これからの歩みの中で生み出される新たな展開にも引き続きご注目頂ければと思います。(St.)

Art & Culture

文化芸術
 文化・芸術研究センター
 ニュースレター

Vol.13

March 2011

発行人:三枝成彰 編集人:富田晋司
 発行:静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 (事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

